

動物倫理の西洋文化 4

ルート＝E・モーアマン
 <屠殺を業とする者よ、汝、鮮血に染まるも・・・>

— 19 世紀の公共屠殺場の設立事情 —

屠殺を業とする者よ、汝、鮮血に染まるも
 そが生業を人間らしく果たすべし
 汝が死へと選びとりし
 動物に苦しみをなすべからず
 いたはりの手にて
 瞬時かつ確かに死をあたふべし
 汝もまたおのれの死の
 やすらかならんと願ふであらう。

— ジーゲンの屠殺場の壁の銘文¹⁾

1986 年から 87 年にかけての冬学期、ミュンスター大学の民俗学科の基幹ゼミでは「ホモ・アニマルクー 人間と動物の関係にみる過去と現在」のテーマが取り上げられた。ゼミの実施では、参加者の全員が<現場検証>をプログラムに組みこむことにただちに賛成した。動物園、家畜収容施設、酪農農家、大学の動物実験を伴う研究所、そして（あるいは、これもと言うべきか）最後に残ったのは屠殺場を入れるかどうかだった。とまれ、十二月に入った時期の二日間の午前中、ミュンスターの畜殺検査協会の施設を十人の学生グループが訪問した。両日とも、空はどんより曇っていた。市の獣医学局の主任リュッケ博士の案内の下²⁾、見学者はショックを受け、目をうばわれた。豚が搬入され、ベルトコンベヤーに載せられて屠殺へ流れて行く仕組みである。見学の日取りには大型

1) 出典、オスナブリュックの都市アーカイヴ：Staatsarchiv Osnabrück（以下では StA Os と略す）Dep3bIV Nr.1868. 開封された封筒の表に鉛筆書きで年次も署名を欠いているが、<当地の警察本部へ>の宛名書きがなされている。1886 年以後に封入された。ジーゲンの屠殺場の見学に因んでオスナブリュックの市職員が思い出のよすがに記したと思われる。またミュンスターの都市アーカイヴをも参照，Stadtarchiv Münster Stadtrege. Fach154 Nr.7: 1844.

2) 同博士（Dr.R.LÜCKE）にはこの場を借りてお礼申し上げる。

獣の屠殺は組まれていなかった。それでも用意した携帯用のウイスキー壺を必要とした学生が二人いたのは寒く湿った天候のためだけではなくたろう。何とか気持ちを保とうとしたのだろう。ベルトコンベヤーがリズムをつけて流れるとともに、見学者の誰もがくお腹がぐうぐう鳴る感じを失っていた。しかし豚のかたまりが肉塊になるにつれて（この工程は多数の作業部門から成っている）³⁾、違和感と緊張は消えてゆき、最後には、学生の二三人は、膨らみと張りのあるハムブロックを手で押したり撫でたりして一体感をたしかめることもできるまでになっていた。西ドイツの豚肉の消費は、1985年を例にとると、国民一人あたり年間 60.1kg に上ることが多くの統計から明らかになる⁴⁾。ゼミ参加者の食欲が急激に減退したのは、もちろん一時的なことである。

以下の報告は、ミュンスターの屠殺場（その所在地はガーデン通り 81 番地で、絵のような地名である）の見学、そして筆者の幼年期や少女期にはなお行なわれていた村の自家屠殺の記憶、そして今挙げたゼミナール「人間と動物」が非常に活発な議論となったことに基づいている⁵⁾。しかしゼミではわずかしき取り上げなかった諸々の問題に焦点を当てている。

屠殺場の歴史

1865 年、書き手は匿名ながら、次のような文書が出回った。

屠殺場（独：Schlachthäuser, Schlachthöfe, 仏：Abattoir, 英：Slaughterhouse, 西：Macello）とは、通常は町村体に属し、稀には屠殺士の団体に属する公的な施設で、畜殺を行ない、また設備が完備している場合は、屠殺に先立つ家畜の止め置きは屠殺業に含まれる。種々の作業工程（ソーセージ作り、穀粉との混ぜ合わせ）をも

3) 筆者たちのミュンスターでの経験と重なる作業工程については次の新聞記事を参照, “Die Ziet” Nr.40 (1986 年 9 月 26 日付) 「私の毎日の仕事：畜殺場にて、90 ヴォルト」(Ulf ERDMANN ZIEGLER の署名)。この記事では豚を鋸引きするとあるが、ミュンスターでは刃物で切断するのが通常であった。；なお 19 世紀から 20 世紀への転換期のアメリカでのベルトコンベヤー方式の屠殺については次の文献が刺激的な記述に富み、また何度も版を重ねた。参照, Upton SINCLAIR, *The Jungle*. New York 1906. ドイツ語訳: *Der Sumpf*. Hannover 1906.; *Der Dschungel*. Reinbek bei Hamburg 1985, bes.S.50ff. また機械化をめぐる基本的な動向については次の文献を参照, Siegfried GIEDION, *Die Herrschaft der Mechanisierung. Ein Beitrag zur anonymen Geschichte*. Mit einem Nachwort von Stanislaus von MOOS. Zürich 1984. (Original: *Mechanization Takes Command*. Oxford University Press 1948), S.238ff. この書物では屠殺場の歴史はパリとシカゴに限定して取り上げられている。

4) 原典, *Deutscher Fleischer-Verband*, ただしここでは『フランクフルト・アルゲマイネ新聞』(FAZ, 1986 年 11 月 15 日付) から重引した。なおこの統計によれば豚肉以外の獣肉を併せた食肉の一人あたり年間消費は 100kg を超えた (1960 年では 65kg であったが、1985 年には 100.5kg となった)。

5) このゼミに参加者に数々の刺激をあたえてくれたことに感謝する。



こなし、さらに廃棄物（獣皮、獣毛、蹄、糞尿）を一時的にまとめることもを受け持つ⁶⁾。

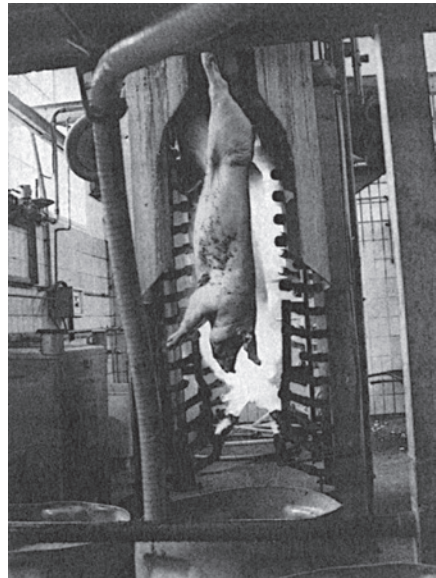
この重要な文書の無名の筆者が文書のはじめでヨーロッパの屠殺場を定義した年、すなわち 1865 年、この定義に合う屠殺場はドイツにはわずか 8 カ所あるだけだった。それは、ハムブルクの一か所を除くと、すべてドナウ河より南であった⁷⁾。その 3 年後の 1868 年 3 月 18 日、プロイセン王国は、公共かつ専用の屠殺場を稼働させた⁸⁾。それと共に地域体の屠殺の制約が射程に入り、また事実、すべてのプライベートな屠殺の禁止も可能になった。まもなくプロイセン以外の国々もそれに倣い、19 世紀の終わりには、ドイツ全土には優に 700 の公共の屠殺場ができていた⁹⁾。

6) ANONYM (こと BRANDES), *Über Schlachthäuser, mit besonderer Rücksicht auf die Verhältnisse in der königlichen Residenzstadt Hannover*, Hannover 1865, S.3.

7) 同上, S.9f. 具体手には、ハムブルク、ニュルンベルク、アウクスブルク、レーゲンスブルク、バムベルク、ウルム、ケムプテン、シュトゥットガルであった。規程に合わないか不十分にしか満たしていない古い屠殺場は、ミュンヘン、ケルン、プレスラウ、ドレスデン、ライプツィヒ、リューベックその他であるが、〈これ以上追加して挙げるのは辞めたい〉(同上, S.9)。

8) たとえばヘルマン・ファルクからも読みとれる。参照, Hermann FALK, *Die Einrichtung öffentlicher Schlachthäuser mit Anhang: Die Schlachthaus-Gesetze sowie Schlachthaus-Verordnungen und Situationspläne*. Osterwieck/Harz 1886, S.45-47.; S.48-50.

9) BROCKHAUS ENZYKLOPÄDIE, 14. Aufl., Bd.14, Leipzig/Berlin/Wien 1898, S.471.



しかしヨーロッパ全体から見ると、屠殺問題ではドイツは遅れている方だった。基準としてここでもナポレオン時代のフランスをとると、王令によって1807年にはすべてのプライベートな屠殺の廃止とあらゆる要望に応えることができる公共施設の新設がさだめられた¹⁰⁾。勅令はその後1810年、1815年、1838年と続き、それによって日常的な屠殺作業が根本的に変化するようになるが、それまでには多くの抵抗を解決しなければならなかった。そのさい抵抗の中心になったのは屠殺を担当する人々自身であった。また、屠殺場は、＜危険で非衛生的で不快な施設の＞の最高ランクに位置しており、それを考慮して住民の居住区域から離れたところに建てねばならなかった。そのための多額の投下資本にはどうであれ起債が必要となったが、それに目をつぶることに自治体は多大の困難を覚えたのである。それでも1818年のパリでは、最初の5カ所の屠殺場、規模の合計では240室の屠殺室をオープンさせることができた。フランスの大都市や中規模都市がそれにつづき、たとえば1861年から1862年への一年間だけでも33カ所に新しい屠殺場が開設され、そのなかには人口千人以下の自治体も3カ所入っていた。かかるフランスを起点にした＜屠殺場建設運動＞が急速に波及したのは特にベルギーだった。ブリュッセルでは1842年以来、最新の大屠殺場への期待が高まっていた。他のヨーロッパ諸国も似たり寄ったりで、特にイギリスとオーストリアでは、1860年代以後、中小の自治体にまで屠殺場が存在するようになった¹¹⁾。

10) ANONYM., *Schlachthäuser* (前掲注6), S.13.

11) 同上, S.7ff.; また次を参照, Theodor RISCH, *Bericht über Schlachthäuser und Viehmärkte in Deutschland, Frankreich u.s.w.* Berlin 1866.

これらの屠殺施設の大多数に共通し、またジョルジュ・オスマン¹⁾が1863年から67年にかけてパリ市域内の北辺ラ・ヴィレットに設けた記念碑的な中央屠殺場で実現させたのも¹²⁾、いわゆる部屋・小房システムあるいは弓柱システムであった。どの家畜もそれぞれの部屋ないしは仕切りのなかで殺されて基本処理がされるのである。これは畜殺が自家の畜殺房で行なわれていたときの工程とまったく違わなかった。

第二の建築仕様の畜殺施設の場合も、大きなホール状の屠殺場を全ての屠殺人が共同で使うことになったものの、個々の手仕事の工程そのものは変動がなかった。そうした施設は、中世や近代初期のツンプトの屠殺工房にその前身をもっており¹³⁾、また20世紀に入るまでヨーロッパでは、伝統的な手仕事のマニュアルの下で活用された。ある意味では単純なこのシステムに大きなメリットがあるかどうかは、1860年代に入ってもすこぶる疑わしいとみられていた¹⁴⁾。しかしドイツでは、1878年にベルリンの数カ所の中央屠殺場はなお屠殺房方式で作られたが、それと並行して、すでに1870年代からドイツ全土で大ホール式が浸透していった。屠殺房ではコストがかかり实际的でもないとして退けられたのである。片や大ホール式のメリットは他にもあった¹⁵⁾。



12) 参照, GIEDION, *Mechanisierung* (前掲注3), S.238ff.

13) 参照, ANONYM, *Schlachthäuser* (前掲注6), S.3f. und 15.; FALK, *Schlachthäuser* (前掲注8), S.5ff.

14) ANONYM *Schlachthäuser* (前掲注6), S.16f.

15) FALK, *Schlachthäuser* (前掲注8), S.26f.

ここ屠殺ホールでは、精肉士が並んでフレンドリーな雰囲気です。屠殺に従事し、互いに助け合うこともできる。そのためにいざこざが起きることは滅多になく、むしろ皆無と言ってもよい。

とは言え、北米のような巨大なホールでベルトコンベヤーに並び、また施設によってベルトが五段式にもなるような合理化された屠殺システムは¹⁶⁾、少なくともドイツの屠殺論議では、19世紀の末になるまで問題にもならなかった。

もっとも、小房式かホール式か、個別屠殺かベルト方式かはともかく、公共の中央施設にメリットがあることは明瞭であった。

＜目下 [= 1865 年]、大都会で屠殺場問題が話題になっており＞¹⁷⁾、またつづく二、三十年のあいだにドイツの中小の町にまで数百の屠殺場が建設されるようになった一因は、1850 年代末から特に北ドイツにおいて広まった旋毛虫の感染であった。1865 年の例をとると、クヴェトリンブルクに近い人口二千人の村ヘーダースレーベンでは、旋毛虫に侵された食肉を食べた 337 人のうち、101 人が（多くは）激しい苦痛に襲われて死亡した¹⁸⁾。ちなみに 19 世紀初め頃は、病気にかかった動物の肉を食べることはまだ危



16) 参照, GIEDION, *Mechanisierung* (3), S.241ff.; SINCLAIR, *Der Dschungel* (前掲注 3), S.50.

17) ANONYM, *Schlachthäuser* (前掲注 6), S.13.

険とはみなされていなかったが、今や、屠殺にさいして感染予防上の検査の必要性が明らかになった。また 1865 年から 75 年にかけてのコレラの流行も、19 世紀を通じて四番目に大きな伝染病であったために、伝染病への予防措置の必要性と対策をうながした。

こうして畜殺場は、都市の人家の地域から離すだけでなく、なろうことなら流水に臨み、また（あるいは）鉄道の沿線が相応しいとされた。なぜならベルンブルクの獣医ヘルマン・ファルク（Hermann Falk）が 1880 年代にはなお多数のプライベートな屠殺が多数行なわれていることを淡々と語っていることから、そうした屠殺はかならずしも水洗に適した場所でも交通のアクセスに便な場所でもなかった。

プリミティブな屠殺は、家屋の門から母屋までの通路や仮仕切りのようなお粗末の舗装の場所でもおこなわれ、その場合、血や糞尿の薄液が地面に染みこむ。そういったことはここ（＝畜殺場）ではあり得ない。ほとんどの場合、屠殺場所、内臓洗浄の場所、ハムへの作業、獣脂の溶解、そして精肉の保管場所、これらはすべて同じ屋内で進められる。¹⁹⁾

そして彼は、綱領的にこう断言する²⁰⁾。

公共屠殺場の原理とは、純粹に衛生問題である。

しかし水場に近いことは、必ずしも衛生問題を解決する前提にはならなかった。たとえば 1864 年に、旋毛虫問題への注意事項としてベルリンの全ての古い屠殺場に対して協会が出した通告の結果は、むしろ暗澹たる事態を招いた²¹⁾。

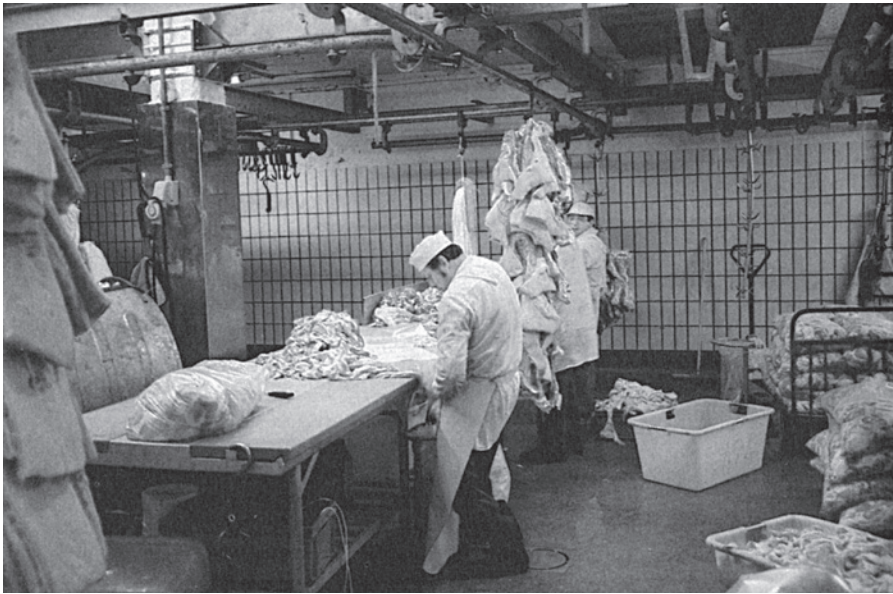
屠殺場はシュプレー川沿い、また一部は川中の杭の上に建てられており、家畜小

18) BROCKHAUS ENZYKLOPÄDIE, 14. Aufl, Bd.15. Leipzig/Berlin/Wien 1898, S.81f.; また同事典に付された (S.838. の次) 「動物地図 II」(獣群から旋毛虫病の感染まで) が特にザクセン＝テューリンゲン地域を中心にあつまっている。

19) FALK, *Schlachthäuser* (前掲 注 8), S.9.

20) 同上, S.19.

21) 引用は次の文献による。ANONYM, *Schlachthäuser* (前掲 注 6), S.14. 乱雑ぶりが他の方面にも延びたことは報告の別の箇所ではっきり現れている。＜三か所（屠殺場）のいずれでも、監視には遺漏が多かったにちがいない。無秩序や堪え難い無軌道への苦情が止まなかったからである。屠殺場の下に汚物が堆積したり、それが街路に運び出されたまま誰も掃除しなかったり、兵士がそのなかへ入りこむと、その種の独身の女たちがうろろしたりもし、挙句は市議の監視団が＜奇声＞、つまり猥雑な話声を耳をするまでになり・・・あるいは追いかけてきた兵士の妻がぬかるみにはまって脚の骨を折るといったことまで起きている＞(同上)。



屋も水洗場も汚物を埋める穴もない。汚物は片隅に積まれているか、あるいは床板に開けた穴からときどきシュプレー川に流すかである。内臓もその傍の盥で洗う。そのため不潔この上なく、小屋そのものもいつ倒れてもおかしくない。

しかしまた、都市のプライベートな屠殺場の衛生状態については、別の報告も存在する。ある町の市議会が隣町に送った説明文書の一節である。たとえばリューネブルク市役所が、町には市独自の屠殺施設がないことに関しておこなった照会の一節である²²⁾。

(市の各所それぞれにいる 23 人の屠殺士は)、家畜を多くの場合、自分たちの専用として特別につくった部屋々々で屠殺する。五か所ほど例外はありはするが、概して広々とした住まいで、屠殺のための小房も店舗も、この上なく洗浄されこの上なく清潔である。地所にはほとんどの場合、水道が通っており、それで徹底的に水洗することが強く勧められている。

イルメナウ川が屠殺の廃棄物によって汚されることがあってはならないことを、市役所の文書は分からせようとしたのではあるまいか。衛生棄損の事例は、畜殺場の仕事に就いている者の目からも明らかに増えているのである²³⁾。

自治体の、独占的な屠殺場の建設をもとめる動きを高めたのは、都市の住宅地域での

22) StA Os Dep 3b IV Nr.276: 1859.

プライヴェートな屠殺が空気・土壌・水質の悪化の恒常的な原因になっているとの認識の広まりであった。コレラの流行、あるいは食肉の腐敗による多人数の発病が頻発するようになり、それが、自治体の屠殺施設の設立計画を（爆発的にとまではなかったにせよ）大いに加速させた。

たとえばオスナブリュック市は、1859年のコレラの流行の後、隣接する諸都市に、屠殺から出る廃棄物とその後始末がどのように行なわれているかを照会した。回答は、（先に見た）リュネブルク市のような自慢から、ハノーファー市役所による＜その種の排泄物を土にうずめないことが重要である＞との賛意までを含んでいる。プレーメンからミュンスターに至る地域の諸都市からは、廃棄物の処理について似たような回答が寄せられたが、それは、屠殺で出た血液は砂糖工場に（リュネブルクでは製塩工場にも）売却され、内臓は犬を飼っている人々の手にわたり、その他の廃棄物は蓋付き容器に入れて、夜中に、町からはなれたところまで運ぶという²⁴⁾。

オスナブリュック市議会の部会は、これに続いて1895年9月13日付けで、＜公共屠殺場の設立は目的に適っているかどうか＞を問題として取り上げたが、＜当地の状況に照らすと困難＞として否定的な判断となった²⁵⁾。同市がポジティブな決定を下すにはなお25年の歳月を要することになる。

公共屠殺場の他のメリットも話題になった。獣医の管理の下におかれることにより、羅病した家畜を健康な家畜からただちに区別することが可能になること、特に家畜の伝染病が容易に識別できるようになることである。この頃になると、羅病した畜肉が人間にも危険であることが知られるようになっていた。一か所で集中的に肉を検査することによって腐敗や羅病の有無を即座に判断でき、廃棄や除去できるのであった。

屠殺場を都市の住宅地域の端に計画する（ないしはすでに設置している）のは、地理

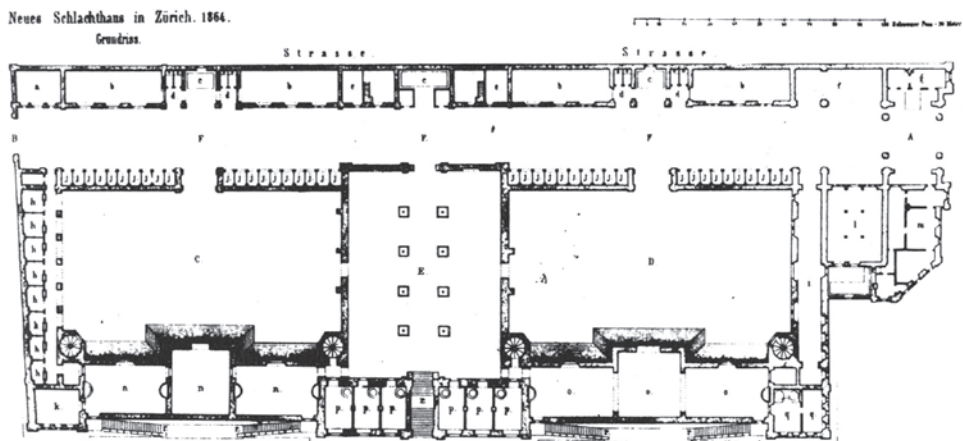
23) 畜殺場に働く者が、＜他の諸都市の畜殺場で我慢ができない不潔＞に出逢ったと報告する一例は、オスナブリュックの補助機械エンジニア E.N. が1906年に提出した抗議に見られる。そこには次のように記されている。＜（畜殺場の）ホールのなかで、親方も徒弟も自分たちの小さな用事を直接すませてしまう。子牛の網を糞尿で汚れているのを構いなく手でつかんだ後、その手を洗いもせずに血の処理に向かう。子牛を引っ張るのに、食肉をつかんで汚れた手拭を使う。獣脂用の長靴で水洗桶に入り、その桶をいわゆる《料理》を盛ったり洗ったりするのにも使う＞（StA Os Dep 3b IV Nr. 1870: 1906 April 12）

24) StA Os Dep 3b IV Nr.276: 1859. 臭気の問題は、知覚の革命によってはじめて現実的となり、大目に見てすませる波動の明らかな減退を結果した。これについては参照、Alain CORBIN, *Pesthauch und Blütenduft. Eine Geschichte des Geruchs*. Frankfurt a.M. 1988, bes. S.81ff.（フランス語原書：Le Miasmet et la Jonquille. L'odorat et l'imaginaire social XVIIIe-XIXe siècles. Editions Aubier Montaigne. Paris 1982.）

25) 同上：ケームニッツでは、病気の獣肉を食べたことによる中毒が既に1857年に話題になっていたが、1879年には多数の被害者が出たことによって改めて激しい議論が起きた。しかしケームニッツの中央屠殺・畜殺場の稼働にこぎつけるには、1884年までかかった。これについては次の文献を参照、ANONYM., *Gewerbe- und Medicinalpolizei. A. Errichtung eines Central-Schlacht- und Viehhofes*. Aus: Bericht über die Verwaltung und den Stand der Gemeindeangelegenheiten der Stadt Chemnitz auf das Jahr 1881, S.1f.; StA Os Dep 3b IV Nr.276: 1854.

的な面でも、人間と動物の両方にとってメリットがあった。それまで、家畜は往来の激しい大通りを牽かれ、人家の密集する市内を追いたてられていた。何かに驚いたり、また列を離れた家畜によって危険な状況になることも多かった。そのため屠殺獣の移動を夜中に限って-いる町もあったが、いずれにせよ騒音は避けられなかった。屠殺場を鉄道との接続に便な場所に設置するのは、食肉市場との結びつきにおいても有利であった。また屠殺場の敷地に広い畜舎を併設すると、屠殺場への距離がなくなるためメリットはさらに高まり、それも自治体による屠殺場の建設を後押しした。その他にも、公共屠殺場の推進論者が挙げたものに、保護の考え方、すなわち屠殺に伴う家畜の苦痛を小さくする課題があったが、これについては後にやや詳しく取り上げよう。

公共屠殺場の反対派（これは従来屠殺を手がけてきた人々に限られなかった）が盛んに言いたてたのは、食肉価格の高騰への恐れであった。しかし調査結果は逆であり、むしろ価格の低下につながった。さらに、屠殺士間の競争の高まりと獣医の管理が効果的にはたらいたことにより、何よりも肉質が向上した。それは、ベルネブルクの獣医ヘルマン・ファルクが明言した事実とも重なっていた。



チューリッヒの公共屠殺場 1884 年 平面図

- A. 入口 B. 出口 C. 運搬車の搬入口ならびに豚の下ろし場所 D. 同じく小家畜の下ろし場所 E. 大型家畜の屠殺ホール F. コミュニケーション空間
 a. 馬厩舎 b. 牛の厩舎 c. 堆肥穴 d. 便所 e. 獣血・獣皮置き場 f. 運搬車置き場 g. 事務所
 h. 豚舎 i. 仔牛舎 j. 肉置き場 k. 木材置き場 l. 羊舎 m. 門衛詰所 n. 豚の臓物置き場
 o. 羊と仔牛の臓物置き場 p. 臓物煮沸場 q. 煮沸場 r. 階段

人間の食用に必要なとなった家畜で自然死を遂げるものが非常に稀であるのは厳然たる事実。

病気で死んだ動物を販売する無良心な屠殺者もおれば、彼らに格安でゆずる家畜所有者よりもいるという現実のなかのことであった²⁶⁾。

とまれ、都市の市議会や都市の代表者たちの理解がなかなか進まなかったとは言え、屠殺場を作る運動は着実に実っていた。一般的に屠殺場の設置が目的に適うことを説く書きもの、あるいは理想的な屠殺場を謳う²⁷⁾のを説く多くの書きものが、1870年代からマーケットに見られるようになった²⁷⁾。他の諸都市の屠殺場を見学した建築家が、それぞれの〈出張報告〉を刊行することもあり、そのなかで、種々の施設の特質が記述された²⁸⁾。

屠殺

屠殺とは〈屠殺可能な家畜をその肉を人間の食用に供することを目的として殺すこと〉を指すが²⁹⁾、19世紀には職業的な営為には種々の方法があった。

1. 胸を刺す、あるいは頸部を切ることによって単純に血抜きするもので、いわゆる（頸動脈の）切断畜殺ⁱⁱ⁾。
2. 予め気絶させておいて血抜きする。
3. 延ばしておいた急所を破壊し（頸部を刺すか叩くかする）、その後、血抜きする。

これらいずれの方法も、その目的は、できるだけ徹底的に血抜きしてしまうことである。血を除くことによって肉の持ちが^{おいご}よくなるからである。血が残った肉は痛みが早く、たちまち腐敗が始まる。また^{おいご}轡でガスを（家畜の口から）吹き込んで窒息死させる方法がイギリスで特許を得たが、特許であるために浸透せず、むしろ多くの畜殺規則では明確に禁止された³⁰⁾。

なお（頸動脈の）切断畜殺はユダヤ教では儀礼に則った屠殺として限定され、また多

26) FALK, *Schlachthäuser* (前掲注8), S.14ff.

27) たとえば次を参照, Jul. SPRINGER, *Führer durch den städtischen Central-Vieh- und Schlachthof von Berlin*. Berlin 1886.; H. BLANKENSTEIN, A. LINDEMANN, *Der Central-Vieh- und Schlachthof zu Berlin, seine baulichen Anlagen und Betriebseinrichtungen*. Berlin 1885.; C.Ch. von BÜLOW, *Oeffentliche Schalchthäuser, ihre Notwendigkeit, Organisation und Rentabilität für alle grossen und mittleren Städte*. 1870.

28) 参照, 建築士ヘニッケの1886年の出張報告を参照, (Baumeister) HENNICKKE, *Reisebericht vom 1886.*; 同じく建築士ケーニヒの出張報告を参照, (Baumeister) KÖNIG, *Reisebericht des Stadtbaumeisters König. Bernburg* (Bernburger Schlachthaus-Acten).o.J. これらの出張報告は次文献による。参照, FALK, *Schlachthäuser* (前掲注8), S.31.

29) 参照, BROCKHAUS ENZYKLOPÄDIE, 14.Aufl, Bd.14., S.469f.

数の屠殺規定がこれを独自に扱っているが³¹⁾、同時に国によっては（ザクセン王国やスイス）全面的に禁止されていた。むしろ予め気絶させてから屠殺を行なうのが最良と見られた。なお気絶させるためには、これまた様座な器具や方法があった。簡単な道具では、棍棒、手斧（特に突起斧）ⁱⁱⁱあるいは大斧であるが、高価な道具として切断尖頭器（打撃の部分が中空鑿^{たがね}の形状をした手斧）^{iv}、鋏ペレット^v、鋏打ちハンマー^{vi}、また屠殺マスク、マスク用鑿^{vii}である³²⁾。

（頸動脈の）切断畜殺については、19世紀を通じて、それが動物をいじめるためのものであるのかどうかをめぐって（縛られた動物は完全な意識をもったまま血を流すために）³³⁾ 議論が絶えなかったが、それ以外の全ての屠殺方法は、＜動物の死を・・・能うかぎり素早く、かつ苦痛が一番無になる手法＞であることを目的として掲げていた。しかしそれらについても議論が続いていたことは、この引用句に添えられた一文によってもあきらかである。すなわち、＜いかにすることが最も目的に適うかは、市議会によって決せられる＞³⁴⁾。

この局面から各地の屠殺規則を検討すると、他の分野での自治体の規則実態との類似点が見えてくる。そこで禁止の対象となったものには、それまでは普通に、あるいは時折行なわれていた種類が多い。以下では、諸所の屠殺規則のなかから関連する項目を拾う。

屠殺決まりたる家畜に対し粗野にして乱暴の扱ひなすを禁ず。駆り立てたる家畜、あるいは縛りたる家畜、屠殺場にて受け入れ之無きやう候。

二十四時間超えて家畜止め置き候はば、持ち主、十分に餌与ふべく、然あらざる折節は、屠殺管理方にて給餌致すべく候。

屠殺決まりたる家畜、屠殺部屋に導き入るるは、屠殺の用意なし終へたる後たること心得ありたく候。

仔牛、屠殺に先立ちて吊るすは之を禁ず。³⁵⁾

30) たとえば FALK, *Schlachthäuser* (前掲 注 8), S.51ff. に再録された「屠殺場の利用に関する条例 (Polizei-Ordnung)」はエルフルトやベルンベルク他の諸都市において適用されていた。その条項 (§ 14) には＜子牛と去勢羊の窒息死を禁ず＞とある。

31) 参照, StA Os Dep 3b IV Nr.1890. この資料のなかに「オスナブリュックの市立畜殺場の基本規則」が収録されて言っている (S.12); StadtA Ms Stadtr. Fach 50 Nr.36: Drucksache Nr.42. des Berliner Thierschutz Vereins o.J. (ca. 1890), Fach 50 Nr. 80: Schlachtordnung der Stadt Münster i.W: vom 15 Mai 1913, § 7.

32) フランス語の Bouterolle は Bajonettöhse (銃剣の鞘) や Stempel (打印器の父型やポンプのピストン) を指す。

33) BROCKHAUS ENZYKLOPÄDIE, 14.Aufl, Bd.14., S.364.

34) Bernburger Schlachthau-Verordnung 引用は次の文献による。参照, FALK, *Schlachthäuser* (前掲 注 8), S.12. オスナブリュックの 1906 年の屠殺場規則では対照的に次のように謳われている。＜失神の方法は畜殺場規則によって定める＞ (StA Os Dep 3b IV Nr.1890: 1906 April 11: § 6)

犬使ひて（あるいは他の手立てにて）家畜追ひ立て屠殺場に連れ来ること禁じ候。
車上にくくりて連れ来るも構へて無きやう存じ候。

家畜駆り立て、過度の疲労なきしめること禁じ候。³⁵⁾

屠殺の現実、またそこで突発的に起きる不規則な事態、あるいは動物虐待について明瞭な輪郭を得ることは容易ではない。文書資料を探ると、むしろ当惑させられることがある。ちなみに、（現実を非常に客観的に映すものとして取り上げられたとまでは言えないにせよ）、動物保護の諸々の組合の同時代の多数の文献には、別の種類の観点からの資料も見出される。

動物保護組合について言えば、最初に設立されたのはイギリスであった。ドイツでも1840年代以来作られていった。たとえばドレスデン 1949 年、ハムブルク 1841 年、ミュンヘンとベルリン 1842 年などであり、その後、20 世紀への転換期には 200 カ所を超えるまでになった。これらの組合が目的としたのは、輓畜の扱い、屠殺用の家畜の運搬と素早い殺し、家禽の肥育と殺しの監視などであった³⁷⁾。

屠殺獣の扱いに関しては、動物保護組合は特に印刷物による関与で、パンフレットや小冊子の配布を通じて活発な動きを見せた。特にベルリンの動物保護組合は非常にアクティヴで、そこから出された印刷物は地域の動物保護組合に配られ、また版を重ねることもあった³⁸⁾。当時のパンフレットのタイトルを数例挙げると、たとえば次のようなものだった³⁹⁾。

「屠殺の残酷」

「すべての善良な人々への呼びかけとお願い：屠殺へと虐待される動物たちに諸兄姉の憐憫を！」

「小動物の屠殺に起きている不必要な虐待の数々」

35) Bernburger Schlachthaus-Verordnung § § 4, 7, 11 und 13. 引用は次の文献による。参照, FALK, *Schlachthäuser* (前掲 注 8), S.12.

36) Osnabrücker Schlachthausordnung vom 11. April 1906, § § 8 und 15 (StA Os Dep 3b IV Nr.1890) – 他の諸都市の畜殺場規則に盛り込まれた諸規程もほぼ同様である。

37) BROCKHAUS ENZYKLOPÄDIE, 14. Aufl, Bd.15., S.844. 以下の動物保護組合の文献は、アーカイヴの観点に合致し、また包括的な性格にあるものに限った。参照, StadtA Ms Stadreg. Fach 154, Nr.7.; Fach 50, Nr.36.; StA Os Dep 3b IV Nr.1524. オランダの最近の文献では次を参照, Karel DAVIDS, *De zondeval van de dierenbeul. Toelatable en ontoelatable gedrag tegenover dieren in Nederland vanaf de late middeleeuwen tot de twintigste eeuw*. In: Een schijn van verdraagzaamheid. Afwijking en tolerantie in Nederland van de zestiende eeuw tot heden, onder redactie van Marijke Gijswijt-Hofstra. Hilversum 1989, S.237-262.

38) 参照, ミュンスターとオスナブリュックの動物保護組合の文献 (前掲 注 37)

39) 参照, ミュンスターとオスナブリュックの動物保護組合の文献 (前掲 注 37)

動物の運搬と屠殺に関する細かい点では、これらの印刷物に見られるのは、屠殺場規則におけるのはかなり違った性格である。これまでに挙げた諸点についても、この種の文書からは、公共屠殺場の日常的な現実は違った光の下におかれよう。豚を追いたてゐるのに犬を使う<この上なくおぞましいしわざ>や、何日にも餌や水をあたえずに放置するといったことも、珍しくなかったらしい。

のみならず、動物を吼えさせないために、夜中だけでなく昼間まで口に猿轡^{viii}をはめて顔の上の方まで紐でくくるといったことが起きている⁴⁰⁾。

しかし動物保護組合を特に立腹させたのは、屠殺そのもの、特に豚の場合には予め失神させることなく屠殺をおこなうことであった。大抵の屠殺規則では、小動物や豚を屠殺する場合、棍棒やハンマーで気絶させるべきであると定められているが⁴¹⁾、屠殺の現場の実態はかならずしもその通りではなかったようである。完全に血抜きをするために、特に豚では、事前に気絶させることなく刺し殺す手法がとられていたのである⁴²⁾。



新ベルリン動物保護組合

中央屠殺場における屠殺獣を失神させる器具

屠殺する家畜を失神させるのも、必ずしも規則通りに行なわれていなかった。各地の屠殺規則は、家畜屠殺を実行できるのは<熟練した力の強い者たち>だけあることが謳

40) StA Os Dep 3b IV Nr.1524. o.D. 文書タイトル „Die Greuel des Schlachtens“.

41) 参照, FALK, *Schlachthäuser* (前掲注 6), S.52.

42) <こうして豚は、予め頭部あるいは頸部を一撃することによって気絶させない場合、恐ろしい悲鳴をいつまでも挙げつつ血を流しつづけさせることになる。切断に伴い血は容器一杯ないしは二杯が流れ出

われていた⁴³⁾。

熟練に至らぬ者ら、同人 [= 屠殺場視察係] によりて退かしむるもの也。

しかし詰まるところ、屠殺士の徒弟も、失神や刺殺の道具の使い方をおぼえる必要があった。その練習は、生きた動物で行われ、時には一頭の動物が何人もの徒弟の練習台になることもあった⁴⁴⁾。練習の道具は、たとえばベルリンの市会議員ヘンツが考案したものがあったが、どこまで普及したかはひとまずおきたい。ともあれそれを使って、必要な力と腕が磨かれたが、それは力の強い牛を一撃で失神させるためには必要であったろう⁴⁵⁾。

雄牛を手斧の一撃で殺すのは、最も習熟した精肉士でも稀なくらいであった。事實は、哀れな四足動物を何度も叩くのが頻繁であった。・・・六回叩くことも珍しくなく、そうした虐待された動物が放置され、数々の不始末がつきまとうことは周知の通りである⁴⁶⁾。

こうした理由から、大型獣を殺すために、より確実に素早い方法が模索されたのは、当然であった。そうした新しい方がブルノー式^{たがね}鋳こ屠殺マスクであった。ドイツでのその最初の使用例の報告は、1874年8月14日のニュルンベルクでのことで、詳しい記

るが、血を受ける容器を空にする間、この貴重な液体を一滴でも無駄にしないために、切断箇所を指に抑えておく> (StA Os Dep 3b IV Nr.1524. o.D.S)。— またアプトン・シンクレアが1905年に<フィールドワーク>のために労働者として一週間はたらいシカゴの畜殺場では、豚は、予め気絶させることなく切断された。参照, SINCLAIR, *Der Dschungel* (前掲 注 3), S.50f. — また次を参照, StadtA Ms Stadreg. Fach 50 Nr.36 にはベルリンの動物保護組合の印刷物が「小動物の屠殺における不必要な動物虐待行為」をはじめ多数含まれている。

43) ベルンブルクの屠殺規則 (Bernburger Schlachtordnung) § 10. ここでは参照, FALK, *Schlachthäuser* (前掲 注 8), S.12. より引用。; また同書に引用されるベルンブルクの規則の § 12. をも参照。

44) <屠殺の作業場では、村の小さな屠殺場所だけでなく、屠殺獣を失神させる大都市の屠殺場ですら、動物を生きたまま見習い徒弟の練習台に使う残酷ぶりには誰しもスキヤンダルを感じるだろう。不器用や腕力不足のための起きる動物虐待は筆舌に尽くしがたい。若者たちが順番に動物に打撃を加えるが、不幸な練習台動物の頭を痛付き手斧で十回以上も叩くことも屢々である。打撃で目玉がえぐられ、頭蓋骨が無残に碎かれることも少なくない。最後に親方がこの練習を終わりにするために、虐待されていた動物に鋭い刃物でとどめを刺す。大都市の屠殺場では、熟練した腕力の強い叩き手が失神させるが、それは例外的で、むしろ上述のような振舞いが一般的であるが、実際にそれを目にする人はおそらく僅かであろう。> (ベルリン新動物保護組合 Neuer Berliner Thierschutzverein のパンフレット Nr.25 o.D. In: StA Os Dep 3b IV Nr.1868.)

45) 同上, StadtA Ms Stadreg. Fach 50 Nr.36; ベルリン動物保護組合 (Berliner Thierschutzverein) のパンフレット Nr.59. 屠殺士に向けた強力・確実な打撃の練習器を取り上げている。

46) StA Os Dep 3b V Nr.240.: 『ニュルンベルク報』紙 1874 年 8 月 14 日付の記事を<証拠>として挙げている。

録が残っている⁴⁷⁾。

革製のマスクで、動物の角の周りで結び、眼隠しにもなる。盾の形をしており、屠殺家畜の脳を平面中央の額の部分は、鉄のプレートが付き、屠殺獣の額に当たるようになる。プレートの真ん中には円筒状の穴があいており、そこに鋼鉄の中空の棒が組み込まれる。それは、一撃ちするだけで、2kgの重さの30cmの木製の棒を牛の脳に4cmから6cm打ちこんで、立ちどころに死に至らせる。また頭蓋骨の開口部から長さ約50cmの検診針を脊髄にまで差し込んで、身体の動きを萎えさせる。しかし脳に開けた穴から空気を注入するだけでも、動物を完全に殺すのには十分である。

屠殺マスクは屠殺獣を失神させる道具であるが、そのメリットには異論がなかったわけではない。屠殺士や屠殺場経営者や自治体議会の見解には差異があった。屠殺獣を能うかぎり即座かつ苦痛なく気絶させるという動物への利点は、使い方を間違わなければ明らかであった。しかし屠殺士の多くは、従来の屠殺方法を変更することに多大の不満をいだき⁴⁸⁾、諸都市の役所は屠殺マスクの普及させることに困難をおぼえた。

たとえばオスナブリュック市役所は、市立屠殺場のオープンを数ヵ月後にひかえた1886年末、多数の都市に対して、屠殺マスクが使われているかどうかを問い合わせたが、背景を見れば無理からぬものだった。

当市では、大型獣を殺すには屠殺マスクを用いることを屠殺規則に盛りこむことを目指してまいりました。当市の屠殺士等はその規程に反対しており、また屠殺監視官に選任された獣医もその方法で殺すことは奨められないとの見解であります。

これに対し、(南は) ツァイツからカッセルまでの諸都市、また(東は) ゲッティンゲンからベルンブルクを通してエルフルトに至る諸都市は回答のなかで、屠殺マスクが

47) 同上。特にニュルンベルクの鋼鉄小物製品製造会社ライカウフ社 (Leykauf) は練習器だけでなく他の屠殺具を製品プログラムに載せている。

48) 参照、これに関してはベルリンの動物保護組合のパンフレット Nr.37 からの転載記事「地方の中心都市の尊敬すべき精肉職匠」があり、その親方は「何年も前から」屠殺マスクの活用だけでなく、他の失神器具をも用いている。すなわち鉄打ちハンマー (Schlagbolzenhammer) すなわち小動物屠殺斧や鉄ペレット (Federbolzenapparat) を用いてきた。しかし屠殺場の現場については次のようにも報告されている。＜すでにかなり前から大型獣向けの屠殺マスクをはじめ、鉄ペレットも備えられているが、片隅の放置されている。それらを使うのは面倒なのである。むしろ牛の頭部を瘤付き手斧で何度か叩く方が好まれる＞ (StadtA Ms Stadtrege. Fach 50 Nr.36. o.D. ca.1889)。

屠殺を業とする者よ、汝、鮮血に染まるも・・・



ベルリン動物保護組合

(ドイツ帝国における動物への大量いじめとの闘いのために)

所在地：H. ベーリンガー

ベルリン南東区ケーニヒグレーサー街 108 番地

屠殺場管理人クラインシュミットの屠殺器具

大型獣および小型獣用

機械製造会社ヘーネマンキュラー（エルフルト）製造

大型獣用

ボルト＝屠殺マスク

定価 17.50 マルク

予備ボルト 1.50 マルク

馬匹用も同価格

保護マスク

定価 35.50 マルク（目隠しマスク付き）

定価 35.50 マルク（目隠しマスク無し）

小型獣および豚の屠殺具

豚用バネ付きボルト

撲屠用ボルト斧

鋼鉄帯・螺旋バネ付き 11 マルク

鋼鉄針金・螺旋バネ付き 8.50 マルク

糸溝ボルト具

螺旋バネ無し 6.50 マルク

仔牛および羊用

撲屠用ボルト斧

定価 3.50 マルク

大 3.50 マルク 小 2.25 マルク

強化持ち柄は追加 1 マルク

上記の全てに合う柄 1 マルク

成牛マスク用棍棒 4.50 マルク（柄を含む）

小型獣用棍棒 3.50 マルク（柄を含む）

規則となっているだけでなく、＜有効にまもられている＞とも表明した。しかし賛同しない自治体もあった。たとえばデュッセルドルフは、＜精肉業者からは、その方法では血抜きが十分にできない＞との声が挙がっているとの説明が示された⁴⁹⁾。それだけに各地の動物保護組合は屠殺マスクの使用を説くことに熱心で、屠殺士個人にまで働きかけるほどであった⁵⁰⁾。

値段の点では、小動物向けの屠殺マスクは比較的安価であるが、そのための練習機材は 160 マルクと値段が張る投資となり、実際にもちいたのは規模の大きな屠殺場だけであった⁵¹⁾。そのため、エルフルトの機械製造会社ヘーネマン・ウント・キュヒラー社は、同地の屠殺場監視官クラインシュミットが開発した失神器具（これは）を 3,50 マルクから 11 マルクという買いやすい値段で提供した⁵²⁾。それに対して、大型獣のための＜根本改良した＞屠殺マスクは同社が手がけた同種の器具では最も高価で、35,50 マルクであった⁵³⁾。これら、いわゆる＜クラインシュミットのハンマー＞や屠殺マスクは、20 世紀まで失神器具として実際に使われていた⁵⁴⁾。

畜殺場の労働者

古いタイプの屠殺場、いわゆる＜仕切り屠殺房＞は、ツンフトの親方自身によって運営され、追加の人員として臨時的にはたらく都市の役所関係者や食肉検査官や重量検査官などが仕事に就いていた。それに較べて新設の屠殺場は当初から専用の人員から成っていた。屠殺の大部分は、土地の屠殺士と徒弟ならびに見習いに委ねられていたが、企業が設立され、その運営と整備のために人員の需要が高まった。

1880 年代半ばには、百万都市ベルリンでは、畜殺と畜舎に従事するのは人員を総合すると、すでに約 300 人を数えていた⁵⁵⁾。他方、同時期の大都市でもブレーメンやドレスデンでは、運営の人員は 15 人から 30 人で、またミュンヘンでは約 90 人であっ

49) StA Os Dep 3b IV Nr.1868: 1886.; また同文書 Dep 3b V Nr.280.

50) 参照, StadtA Ms Stadtrege. Fach 50 Nr.36. ベルリン動物保護組合のパフレット Nr.42. これはシュトルプ (Stolp) 屠殺場検査官シュヴァルツ博士による次の付属文書の写しが併せられている。＜練習器具を備えることは、畜殺場の経理の状況から当面は不可能である。しかし我々は、活動を始めた動物保護組合による提供を可能にしたい＞。(o.D. ca. 1890)

51) [訳者補記] 注番号はあるが記載を欠く。

52) StA Os Dep 3b IV Nr.1868. に収録されたベルリン動物保護組合のパフレット Nr.26. によれば、20 世紀に豚用失神器として一般化する鋸撃ち器 (Bolzenschußapparat) が現れたのはようやく 1925 年であった。なお今日では、電流による失神が一般的である。コレラに就いては次の文献を参照, Heinrich SIUTS, *Bäuerliche und handwerkliche Arbeitsgeräte in Westfalen. Die alte Geräte der Landwirtschaft und des Landhandwerks 1890-1930.* (Schriften der Volkskundlichen Kommission für Westfalen, 26) Münster 1982, S.186.

53) StA Os Dep 3b IV Nr.1868. に収録されたベルリン動物保護組合のパフレット Nr.26.

54) 参照, StadtA Ms Stadtrege. Fach 50 Nr.36.

た。もっと小さな町、たとえばゲッティンゲンでは、都市の会計にたずさわるのは僅か 5 人にすぎなかった⁵⁶⁾。

管理職ないしは行政者の給与は直接的には比較し得ない（住宅、暖房のほか、旋毛虫病の検診等が加算されるので）⁵⁷⁾ が、さらに下の階層ではなお若干の変動幅が見られた。年間収入は、いわゆる<^{クネヒト}丁稚>はゲッティンゲンでは 600 マルク、プレーメンでは 750 マルクであった⁵⁸⁾。また 15 年後の 1900 年には、オスナブリュックでは市立畜殺場の労働者の年収はようやく 900 マルクであった⁵⁹⁾。

世紀の転換期の労働者の勤労条件をオスナブリュックの場合で見ると、余暇やアフターファイヴといった言葉とは無縁であったことがたちどころに見てとれる。労働時間は、十一月から五月までは 7 時から 19 時まで、四月と九月と十月は 6 時から 20 時まで、五月から八月までは 5 時から 20 時までであった。昼休みは 12 時 30 分から 14 時までである。

また仕事が終わった後、屠殺ホールを清掃するにはまる一時間の延長となることも屢々であった。日曜と祭日には、労働者は早朝、1 時間半から丸々 2 時間働かねばならなかった。また爽やかに勤務時間として、集中して仕事ができる夏季には畜殺場での午前中の仕事はさらに一時間追加された⁶⁰⁾。こうして労働者の過程では、5 人か 6 人の子供たちには父親が不在の時間が非常に長かった。しかしまた 24 年間勤続した者には、証明書と祝辞、また賞状と記念のプレゼントの 150 マルクがあたえられた⁶¹⁾。

大勢の屠殺士や畜殺場での勤務者には不当な仕打ちをすることにはなっているであろう。しかし屠殺という営為からは、力を要求する活動を満足させるだけでなく、粗野と暴力に傾く男たちというイメージが引き出された面があった。たとえば畜殺場で働く者たちは<粗野で喧嘩好きのあんちゃん>として、<誰彼の見境なく罵ったり腕力でおどすような連中>⁶²⁾ として思い描かれてきた。また雄牛の目玉をもつ屠殺士の投げ試合といったことも言われてきた⁶³⁾。また 14 歳以下の子供には屠殺を見せてはいけないと

55) 屠殺場の運営責任者には一戸建て住宅（1430 マルク相当）と年間給与 1 万マルクが支給され、また獣医長は 6 千マルク、主任は 1500 マルク、守衛と倉庫番は 1000 マルクであった。以上は FALK, *Schlachthäuser* (前掲 注 8), S.54f. による。; 300 人という大きな数字のなかで、100 人だけは食肉検査官、また 40 人は顕微鏡で食肉を点検する人員であった。

56) 同上, S.35ff.

57) ヘルフォルト (Herford) では屠殺場管理者と、同時期の獣医には年間 1500 マルクという最低の待遇であったことがあったことが跡づけられる。しかし、管理者には作業に使える 5 アールの面積の土地と搬入された食肉の半分の販売が委ねられた。

58) 同上, S.35.

59) StA Os Dep 3b IV Nr.1870, 1900. .

60) 同上に収録された、二人の畜殺場勤務者 Fr.V. と H.B. に対する賃金引き上げ要求の根拠として、畜殺場の管理者ブルクマン (H. BURGMANN) が残した文書による。

61) 同上, 1915 年 7 月 22 日付。

して、屠殺場の作りにも子供の目に入る機会を無くすという考え方がとられた。それは子供の＜情操を害さない＞ためであり、＜童心をとげとげしくしない＞ためであった。またそうした考え方は、動物保護組合の無数のパンフレットでも特記された⁶⁴⁾。それだけでなく、獣医たちも、衛生や獣医学や予防衛生学のポリシーをたずさえて、かかる倫理的な理由に奉仕した⁶⁵⁾。

都市から給料をもらっている労働者たちは、畜殺場から市役所の別の部署へ転勤になることもあった。たとえばオスナブリュックのある補助機械エンジニアは、市立園藝苑に（給与は下がったが）落ち着いた⁶⁶⁾。これは言い換えれば、労働者が職場の確保の点ではある種の保証を（現代の労賃・労働条件法に則ったものではないにせよ）得ていたことを意味する。しかし逆に、定職としての屠殺士と屠殺場勤務者の間に位置にあった職場の保証についてはかなり高いリスクをかかえている種類の人員もいた。

それはいわゆるパートタイムの屠殺士あるいは臨時雇用屠殺士ないしは精肉補助士で、勤務としての屠殺への給与は＜派遣払い＞として扱われた。こうした賃労働の屠殺士が公共屠殺場が設置されるようになった当初から存在していたかどうかは、当時の文書資料からは確かめられない。実際、初期の畜殺場規則には彼らは現れない。確認されるのは、かなり後の1913年にミュンスターの畜殺場で賃屠殺士に向けて発せられた＜就業規則＞で、そこに彼らについて細則が記されている⁶⁷⁾。オスナブリュックでは、その種類の人々はすでに20世紀の初めから確かめられる。これらから推すと、早く1880年代や90年代には彼らが（主に大規模な畜殺場では）働いていたと見られる。年老いて独立した屠殺士としては自立の可能性のない者や、屠殺士の助手として雑務に従事してきた経験者や、かつての自立した屠殺士で貧窮に陥った者、こうした人々が賃仕事の屠殺士のリクルート源であったのだろう。

彼らの外観はまことにみすばらしく、またその振舞いも評価に影響したと思われる。彼らには、＜畜殺場に籠やバケツ、その他の容器を持ちこんだり、携帯して外へ出たりすること＞が禁じられた。＜精肉助手はプレゼントを貰うことはできず、特に現物の給

62) 同上、畜殺場管理者ブルクマンによる1907年3月5日付の文書。また精肉業の徒弟が失神させない豚を突き刺す＜ぞっとするような楽しみ＞については、次を参照、StadtA Ms Stadtrege. Fach 50 Nr.36. として収録されたベルリン動物保護組合の印刷文書の記載、＜ぴくとも動かない半死の家畜を突くなど、面白くもおかしくもない。やはり動物は走らなきゃあ……。以下は再録しない。取り囲んでいる連中は大笑いする＞（同上、S.5）

63) Walter JANKA, *Schwierigkeiten mit der Wahrheit*. Reinbek bei Hamburg 1907, S.21f. 著者の記すところでは、この個別事項のために、レーオンルト・フランク（Leonhard FRANCK）の長編小説は＜味気ない＞として東ドイツの検閲によって認められなかった。

64) 参照、StadtA Ms Stadtrege. Fach 50 Nr.36. に収録されたベルリン動物保護組合の多様なパンフレット

65) 参照、StA Os Dep 3b Nr.1890, 1904 Februar 1.

66) 同上、1906 April 12.

付ではなく、賃金を現金で払ってもらっただけ⁶⁸⁾ だったからである。かかる規程は、それに該当する事態が発生していなければ記されなかったと居言えよう。また、何でも廃棄物を集めたり、獣肉・血・臓物・獣毛その他の不要物を販売したりすることも禁じられていた⁶⁹⁾。これは、第一次世界大戦の前夜の段階でも、ミュンスターの畜殺場が実質重視と合理主義の高い段階にあったことを示している。と言うのは、これより僅か数年前のオスナブリュックでは、廃棄物やその犬や豚の飼料あるいは肥料としての販売は、施設の親方や現場の労働者の判断にゆだねられ、彼らのあいだで分けられていたからである。これに因んで労働者 E. N. がそれが<昔からの、私よりずっと前からの慣行>を引き合いにしているのは、その根拠自体は怪しげながら、流れからは信じてよいだろう。しかし彼は、時代の動きを認識していなかった。やがてオスナブリュックでも、廃棄物を労働者が利用することが禁じられた。それも<小額の酒手>にあたるとして拒否された。彼が反発したことが、却って取り止め、ないしは廃絶に至ったのである⁷⁰⁾。

賃仕事ないしは労務雇いの屠殺士は人格的にも職種面でも、伝統的な屠殺職匠^{マイスター}と未熟練労働者のあいだのグレーゾーン^{マイスター}の存在であった。またそれによって、20 世紀の巨大な屠殺施設における現代のベルトコンベヤー屠殺へと発展するための積み石であった。彼らは、自分たちが屠殺す家畜を飼いならし育成し肥え太らせた農民を知らないままだった。彼らはまた、自分たちが切断した肉塊をソーセージに仕立てる本来の屠殺士とも無縁であった。さらに彼らは、最上の焼き肉用の肉を選ぶ顧客とも別であった。彼らは、ひたすら流れ作業のなかの自分の位置にいて、すばやく目玉をえぐり、耳を切り取り、たしかな手つきで刃物を揮っていた。

訳注

- i (109) ジョルジュ・オスマン (Georges-Eugène Haussmann 1809-91) : パリに生まれ没した政治家。1853 年から 70 年までセーヌ県の知事をつとめ、在任中、皇帝ナポレオン三世と共にパリの改造計画を推進して、今日にいたる近代都市パリの基礎をつくった。
- ii (115) (頸動脈の) 切断畜殺 (Schächten) : 本文にあるようにユダヤ教で許容された唯一の畜殺方法である
- iii (108) 手斧 (Beil 特に瘤付き手斧 Knopfbeil) : 刃の反対側 (上部) の先端にこぶ状の突起のある手斧
- iv (116) 切断尖頭器 (Hakenbouterole 打撃の部分が中空鑿 (たがね) の形状をした手斧)
- v (116) 鋌ベレット (Federbolzenapparat) : 鋌打ちのために注射器のような形状で刺殺棒が仕組まれた器具。
- vi (116) 鋌打ちハンマー (Schlagbolzenhammer) : リベット・ハンマーと近似した仕様の打撃器。

67) StadtA Ms Stadtreg. Fach 50 Nr.80: 1913 Mai 15.

68) 同上

69) 同上

70) StA Os Dep 3b IV Nr.1870, 1906 April 12.

vii (116) マスク用リベット鑿 (*Maskenbouterole*) : 家畜の顔面をおおう革のマスクと組み合わせの刺殺器。原著の器具解説の写真を参照。

viii (118) 猿轡 (*polnische Bremse*) : <ポーランドの鼻挟み>は猿轡とは少し違って口の開閉を妨げる金属や皮革の小道具であるが、ここでは便宜的にこの語を当てた。

〔訳者解説〕

本稿はルート＝エーディット・モーアマンの論考の翻訳である。はじめに書誌データを挙げる。

Ruth-E. Mohrmann, „Blutig wol ist Dein Amt, o Schlachter . . .“ *Zur Errichtung öffentlicher Schlachthäuser im 19. Jharhundert*. In: Hessische Blätter für Volks- und Kulturforschung. NF d. Hessischen Blätter für Volkskunde, Bd.27 (1991), S.101-118.

ルート・エーディット・モーアマンは1945年にニーダーザクセン州イルゼーデ（パイン郡 Ilsede, Lki Peine）に生まれ、マールブルク、キール、ミュンヘンの諸大学で学び、特にキール大学でカール＝ジーギスムント・クラマー（Karl-Sigismund Kramer）について文献史学の手法を取り入れた歴史民俗学・地域民俗学を収めた。そしてクラマーの下ですすめたホルシュタイン地方の中規模都市を対象にした「ヴィスターの十六―十七世紀の民衆生活」によって1975年に学位を得た。その後、ミュンスター大学で比較都市史研究部門の助手となった。同大学では特にギュンター・ヴィーゲルマン（Günter Wiegmann）に就き、1986年に「ブラウンシュヴィク地方の日常世界——十六世紀から二〇世紀に至る都市と農村の住宅文化」の研究によってミュンスター大学で教授資格を得た。1988年にバイロイト大学のフォルクスクンデ（民俗学）の教授となった。1993年にミュンスター大学の教授として、同大学のフォルクスクンデ＝エスノロジエ学科の主宰となった。



著作など

ここでは学位論文と教授資格申請論文を元にした研究成果のみを挙げる。

Volksleben in Wilster im 16. und 17. Jahrhundert (=Studien zur Volkskunde und Kulturgeschichte 2), Neumünster (Diss. Kiel 1975) 1977.

Alltagswelt im Land Braunschweig. Städtische und ländliche Wohnkultur vom 16. bis zum frühen 20. Jahrhundert, 2 Bde. Münster 1990. (Beiträge zur Volkskultur in Nordwestdeutschland 56), 元は Habilitationsschrift Münster. 1986)

ルート・E・モーアマンの研究の特徴

モーアマンの研究の性格を知るには、その二人の師を挙げるのが分かり易い。クラーマー、ヴィーゲルマンの二人は共に実証性の強い、文献史学と接する民俗学の代表者である。クラーマーはその歴史民俗学を＜法民俗学＞の概念の下で大成させた。ヴィーゲルマンは必ずしも多作家ではないが、『ドイツ民俗地図』の解説を兼ねた『ドイツの料理 - 晴れの日と日常食』というドイツの民俗学の金字塔と言ってもよい研究成果を結実させた。ドイツの食文化史研究の代表作な成果というだけでなく、地図的ないしは地理的な研究方法の可能性を突きつめた点でも不滅の意義をもつ。それ以外には比較的小さな研究を諸誌に執筆しているが、方法論において一方の雄であった。

そうした背景もあって、モーアマンの仕事はいずれも文献史学と接する実証性のつよいものとなっている。また書き物は非常に多い。単著が少ないのが意外な感じがするが、諸誌への発表や、自ら編集したものは多数に上り、ドイツ民俗学界を通して最も生産的な一人と言ってもよい。レパートリーも広く、歴史民俗学、地域史・地域民俗学、食文化、観光研究などにわたっている。またミュンスター大学の民俗学科にあたるヨーロッパ・エスノロジー学科とその教員・研究者組織が刊行している「北西ドイツの民俗学」のシリーズを主宰している。この叢書は、ドイツ民俗学界でも特に充実しており、その刊行点数の多さと質では、テュービンゲン大学の民俗学科とその教員・研究者組織にあたる「ルートヴィヒ・ウーラント研究所」が刊行している叢書「フォルクスレーベン」に匹敵する。後者はヘルマン・バウジンガーが率いてきており、民俗学のあり方について方法論的にも新しい企画や着想が特徴的であるが、モーアマンが永く主宰した叢書は文献史学と地域史研究の性格を呈するものが大半である。

家畜屠殺に関する本稿の特徴

本稿を訳したのは、訳者（河野）が西洋の社会と文化における動物観、とりわけ動物倫理（Tierethik）に関心の一つとしていることによる。愛知大学国際コミュニケーション学会の編集の形で紹介してきた「動物倫理の西洋文化」はこれで4篇目となる。

日本では、西洋は肉食文化で、また動物を人間と峻別してそれを食源とすることにまったくわだかまりがないという理解が一般にかなり一般的である。その場合の肉食は獣肉を指している。しかし他方、今日、西洋の国々のなかには動物の殺傷を非常な犯罪と見て、伝統的な食材ですら禁止の対象とする意外な行動がみられる。肉食文化と動物保護

の両極のいずれも先鋭であるために、他文化の者はとまどいを覚えている面すらある。実際、日本では、西洋の人々の動物への観念の仕組みがよく理解されていないところがあると思われる。解きほぐして根底まで降りてみれば、一見矛盾した行動や主張も理解できるはずであるが、そのためにも少し材料を共有する必要もあろう。

今回、これを訳したのは、短い論考にもかかわらず家畜屠殺の要点がよく整理されており、また手堅い実証研究で定評がある論者のものだからである。特に家畜屠殺にさいして人間的な扱いへの配慮がいつごろから強まったのかを知りうるのは挽益する。19世紀の最後の四半世紀あたりであり、そこから見ると食肉となる動物の苦痛への配慮はすでに150年近い歴史をもっている。思想史的な検討を加えた論文ではないが、事実をおさえている点で確かな拠りどころの一つになるだろう。

もっとも、屠殺の歴史的研究が他にないわけではない。かなり大部なものも知られている。屠殺場は見ようによれば派手な施設で、たとえばアメリカのシカゴの大屠殺場は早くから有名になっており、日本でも大正時代の世界旅行の案内書を開くと、海外旅行の名所の一つとして挙げられていたことがある。それゆえ、決してマイナーな研究対象ではない。しかしそうした基本文献を見ても、(大ざっぱな言い方をすると) つまるところ、ここで説明されているような内容が地理的に拡大しているだけという面がある。特に家畜屠殺に人間らしさが要求されるようになった時期とそのときの実態となるとそうである。

また別の面からコメントを加えると、私的で小規模で家畜屠殺の実態となると、本稿から得られる印象とはまた別のものがあるかもしれない。豚を一頭さばくのは、村では20世紀の後半まで行なわれており、そこに漂うのは牧歌的とも言えるような雰囲気なのである。それは羊も同様で、羊をさばいてもてなされた筆者の経験に徹しても、日本人が生け魚を調理するのとそう変わったものではないとも言える。私見はいずれ述べたいと思うが、ともあれ共有する資料を一つ加えたのである。

なお本稿の翻訳に当たっては、論者のモーアマン女史と掲載誌の編集者であるマールブルク大学民俗学科のジークフリート・ベッカー教授の好意的な配慮を得たことを明記する。

Sep.2014 S.K.